
鋼の彫像

堀田彰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼の彫像

【Nコード】

N1021Z

【作者名】

堀田彰

【あらすじ】

日本近海に五つの隕石が落ちた。しかし、それはただの隕石ではなく、宇宙人そのものだったのだ。

鋼の彫像が、不屈の精神で敵に立ち向かう長編バトルアクション小説！

第一話 発端

アブラゼミが鳴いている。

強い日差し、高い気温。

東京。

下町と呼ばれているが、観光名所ではない。

隕石が落ちるまでは。

広い土地――

高い壁が、土地の周囲を囲んでおり、監視カメラまである。

その中に、ポツンとある建物。

白塗りで、五階立て。奥行きがあり、横長だ。

二つの入り口がある。

一つ目は、敷地に入るため。

二つ目は、建物へ入るための入り口だ。

どちらにも、制服を着た警備員が配置されている。

周辺の歩道には、福岡の屋台街のように、多くの屋台が出店されている。

その中でも、特に客が集まっている屋台が一軒。

二輪の移動式ではなく、組み立て型のテントだ。

屋根からは“宇宙人やきそば一個五〇〇円”と、書かれた幕が垂れている。

焦げたソースのにおいが、煙に乗って漂い、食欲をかき立てる。

「いらっしやい、美味^{おい}しいやきそばだよ」

しゃがれた声を出しているのは、白いハチマキを巻き、紺^こ色の前掛けを着けた、パンチパーマの中年男。

名前を東郷龍児^{とうこうりゅうじ}。

五一歳。

黒髪の中に、少し白髪が混じっている。

龍児は、慣れた手つきでやきそばを焼き、プラスチックのパックに盛り付ける。

「ありがとうございます。熱いのでお気を付け下さい！」

パックに割りばしを乗せ、輪ゴムを巻き、客に渡すのは、隣にいる若い女。

茶色の髪は後ろで束ねられ、赤のエプロンを着け、キャップをかぶっている。

大量の客を、この二人だけでさばいているようだ。

「龍児さん、もう少しペース上げてください！」

女は客の行列を見ながら、横にいる龍児に言った。

日が高くなるにつれ、客は増える一方だ。

「無茶言つな。これで精一杯だよ」

そう言つて、龍児は冷静にペースを維持する。

ここは他店に比べて、具の量が多く、食べごたえがあり、何よりうまい。

それが口コミで広がり、いつの間にか人気店となっていた。

原価は高くついたが、大量の観光客を利用しての薄利多売が成功したのだ。

「今日食えないやつは、明日また来る」

低く、静かに龍児が言う。

確かに、そういう客がいたことを二人は知っている。

「それはそうですけど……」

女が、不安そうに言う。

女の名前は、北条涼子。ほうじょうりょうこ

今年で十九歳。

半年前、龍児に弟子入り。それ以来、接客と雑用を担当している。

涼子は、龍児には無い活気で、店を盛り上げている。

「よし、できたぞ」

そう言っていると、龍児がやきそばを複数のパックに盛り付ける。

待ってましたとばかりに、涼子が割りばしと輪ゴムを用意する。

「お待たせしました！」

涼子が、パックの一つを客に渡す。

最初はこの作業すら、満足にできなかったことを考えると、笑ってしまう。

家に帰っても、必死で練習した。

クビになりたくなかったからだ。

それほど龍児のやきそばが感動的なものだったし、それを屋台のやきそばとして提供していることに敬服したのだ。

「すみません。一つ、もらえますか？」

次の客が注文する。

涼子は、ハッと我に返る。

余計なことを考えている場合ではなかった。

「はい！」

涼子が、差し出された代金を受け取るうとする。

「ありがとうございます——」

客の顔を見て、思わず涼子の手がとまる。

白人の女だ。

今や、外国人は珍しくも無い。

だが、この女は違う。

美しい、金髪のロングヘア。

吸い込まれるような碧眼。^{へきがん}

身長は、涼子より少し高く、一七五センチメートル程度。

黒いジャンパーの前は、一番上まで閉じられている。

腰の位置が、高い

スラリとした長い足は、これまた黒のジーンズと、ブーツに包ま^{つつ}れている。

細身だが、ひ弱には見えない。

「どうかしましたか？」

艶^{つや}のある声で女が言う。

流暢な日本語^{じやうちやうじゆ}。

耳が痺^{しび}れる。

「ああ、すみません！」

涼子は、その場をごまかそうとする。

慌てながらも、なんとか代金を受け取った。

「あっ……」

涼子が、思わず声をもらす。

雪のように白い、女の両手が、涼子の手を握っていた。

「お仕事、がんばってください」

女が、やさしく微笑^{ほほえ}む。

涼子は、激しい動悸^{おそ}（どつき）に一襲^{おそ}われた。

何か言わなくては――

そう考えるが、言葉が出てこない。

数秒の沈黙。

「ミス・シェリー。彼女が困っています」

女――シェリーの隣にいる人物が、声をかける。

身長は、一八〇近く。

奇妙な格好をしていた。

タキシード姿で、白い手袋と、黒いフルフェイスのヘルメットを身につけている。

服装、声のトーンから、おそらく男。

服の上からでも、全身の筋肉がひきしまっているのが、よくわかる。

黄色いバイザーのせいで、顔は見えない。

「申し訳ございません。お嬢さん」

頭を下げながら、男が言う。

嫌味を感じさせない、上品で陽気なしゃべり方だ。

「ご迷惑だったかしら？」

シェリーが、潤^{うる}んだ目で、涼子を見る。
涼子の動悸が、さらに激しくなる。

「涼子、いつまでやってんだ」

龍児から声がかかった。

やきそばのパックは、いつでも客に渡せるようになっていた。
龍児がやったのだろう。

「ごめんなさい！」

龍児を見て、涼子が声を響かせる。

シェリーも、涼子の手を離した。

「どうぞ、熱いのでお気をつけください！」

涼子の声に、いつも以上の力が入る。

「ありがとう。また来るわ」

シェリーが、パックを受け取ってから言った。

「それでは、失礼いたします」

タキシードの男がそう言うと、二人は列を離れた。
涼子は、二人の行方を目で追いかけてようとしたが、人混みの中に消えてしまった。

「お前、そっちの趣味だったのか？」

龍児が、いたって真面目な顔で言った。

「ち、違いますよ！」

涼子は、顔を赤くして叫ぶ。

どうかしていた――

と、涼子は思った。

考えてみれば、恐ろしいことだ。

シェリーに魅了みりようされていた。

彼女にとっては、性別など関係ないのだ。

もし、もっと長く彼女と話していたら――

涼子の背筋が凍るこお。

胃袋が、焼けるように熱くなった。

「また来るわ――」

シェリーの言葉が、何度も頭に響く。

いつでも来ればいい。

今度は大丈夫だ。

そう覚悟を決めると、涼子は客の応対を再開した。

暗い。

このあたりは、街灯がほとんど無いためだ。

太陽が沈んでも、相変わらず暑い。

涼子と龍児は、店じまいを終えていた。

昼間ほどではないが、まだ人が残っている。

反対側には、白塗りの建物の前で、昼とは別の男たちが警備をし

ている。

あのあたりの土地は、大きな工場を解体した後に来た、さら地だった。

去年、あの場所に隕石が落ちてから、地域の状況を一変させた。地球に落ちた隕石は、合計五つ。

そのうち、直径五十センチの隕石が四つ。

太平洋に、二つ。

日本海に、二つ。

太平洋に落ちたうちの一つは、途中で分裂していた。それが、東京に落ちたのだ。

小さな破片だったが、燃え尽きずに落ちたのだ。

その結果、このあたりは、一大観光地となった。

隕石が、五つも同時に落ちる。

しかも、その後には、政府の施設が建設された。

人々が、宇宙人の存在を疑ううたがものも、無理はないだろう。

涼子も、宇宙人の存在を信じる者の一人だ。

店じまいが完了すると、夜遅くまで施設を観察している。

徒歩で自宅に帰れるため、仕事への影響も少ない。

龍児も、涼子が心配なのか、話し相手になっている。

この時間だけは、二人ともプライベートな会話を行っている。

「涼子、今日は何かありそうか？」

龍児が、前掛けをはずしながら、涼子の隣となりで言った。

「正直、わからないです」

涼子が、エプロンとキャップを脱ぎながら言う。
Tシャツと、短めのジーンズが露出した。

「そうか。じゃあ、なんでここにいるんだ？」

「それもわかりません。でも、ただ立っているだけで楽しいんです」
「楽しい？」

「はい。自分の地元がこんなに盛り上がってるのって、初めてなんです」

「確かに、そうだな」

「だから、感謝しているんです」

「宇宙人にか？」

「はい。バカですよね」

「別に、いいんじゃないか。俺も商売大繁盛だからな」

「ええ。本当に、いいことばかりです」

そう言つと、涼子は束ねていた髪をおろした。

肩にかかるくらいの長さがある。

「さて、俺はそろそろ帰るかな」

龍児が、腕時計を見て言った。
時間は、十一時を回っている。
涼子も、自分の腕時計を見た。
そのとき――

「あら、また会ったわね」

艶のある、涼子にとって忘れられない声だった。

「こんばんは、シェリー」

涼子は、冷静に声をかける。

シェリーの隣には、タキシード姿で、白い手袋をつけ、フルフェ

イスのヘルメットをかぶった男もいた。
シェリーと男が、涼子たちに近づいてくる。

「お二人とも、お仕事は終わりですか？」

男は相変わらず、上品で陽気に話しかけてくる。

両手には、中身が満タンのポリタンクを、四つ持っている。
十六か二十リットルの、大きな容器だ。

「ええ。あなた達は？」

涼子が男を見て言った。

「我々は、これから仕事です」

男が答える。

続けてシェリーが、

「見学していく？」

シェリーの声色こわいろが変わった。

涼子の全身に、鳥肌が立つ。

直感的に、何かを感じた。

「悪いけど、もう帰らないといけないの」

涼子が、震えを押し殺して声を出す。

「そう、残念ね。すぐそこなのに……」

シェリーは、そう言って指さす。

涼子と龍児が、その指の先を見ると、そこには白塗りの建物がそびえ立っていた。

「冗談でしょ？」

涼子が声を震わせて言う。

ウソだとは思っていたが、シェリーの言葉に妙な説得力を感じていた。

どうしてこんな冗談を言うのか、とも考えていた。

「本当よ。でも、信じてもらえないわよね」

シェリーの顔が曇る。

昼間とは違う、何かを隠している目つき。

それが何かは、涼子にはわからない。

「本当のことを言ってくれないと、信用できないわよ」

本心から、つい飛び出した言葉であった。

その証拠に、涼子の声から震えが消えている。

「ごめんなさい。でも、どうしても必要な事なのは確かよ」

シェリーの声には、並々ならぬ意思が感じられる。

「そういえば、まだお名前を聞いていませんでしたね。よろしければ、お教え願えませんか？」

しばしの沈黙の後、男が声を上げた。

「もちろん。私は北条涼子」

「よろしく、ミス・北条」

男は、ポリタンクを地面に置いてから、手袋をはずした。

男の手は、針金に墨を練りこんだような、重厚な黒い線が何重にも駆け巡っていた。

輪郭の部分を強調するように、シルバーの線が何本か走っている。素肌の部分は、まったく見えない。

「よろしく」

その手と、涼子は握手をする。

男の手は弾力が強く、やわらかい手であった。

「そちらの紳士は？」

男が龍児を見て言った。

「東郷龍児だ」

「よろしく、ミスター・東郷」

「ああ……」

龍児には、友好的な感情は見られない。ただ手を出し、声を出しているだけであった。

「それで、あなたの名前は？」

空気を察知して、涼子が男に話しかける。

「ありません」

即答。

負い目を感じさせない、当然であるかのような言い方であった。

「そいつはおかしいんじゃないか？」

静かに、重く、龍児の声が響く。

「龍児さん、失礼ですよ」

涼子が、慌てて割って入る。

「他人に名前を聞いておいて、自分は名乗れないってのは、どうい
う了見だ？」

「龍児さん……」

「それから、そいつを何に使うつもりだ？ 夏場にストーブを使う
のかい？」

龍児は、地面に置かれたポリタンクを指差す。

「龍児さん、やめてください」

「お前らまさか——」

「龍児さん！」

涼子がたまらず叫ぶが、龍児は、男の顔を睨みつけたままである。
異変に気づいたのか、周囲も少し騒がしくなってきた。

「正論です、ミスター・東郷。ですが、事実です。気に障ったのなら、謝ります」

長い沈黙の後、男が口を開いた。
口調には迷いが感じられない。

「そうかい……」

口ではそう言ったが、龍児の顔は納得していない。

「目立ちすぎた。そろそろ行くよ」

シェリーが周囲を見渡して言った。口調から美しさがなくなり、
乱暴で、冷酷な印象を受ける。

涼子の胃袋が縮み上がった。

これだ――

涼子は確信した。

シェリーに感じていた何かの正体は、この冷酷さであったのだと。
それと同時に、涼子は疑問に思う。

なぜそれを隠そうとしたのか？

知られてはいけない理由があるのだろうか？

「イエス・コマンダー」

男が、陽気さを消した重い声で答え、ポリタンクを持ち上げる。

そして、シェリーと男は、敷地に入るための入り口へと向かって
行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1021z/>

鋼の彫像

2011年12月3日21時53分発行